

---

# 魔法じかけの僕ら

士功征宗

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

魔法じかけの僕ら

### 【コード】

N9135A

### 【作者名】

土功征宗

### 【あらすじ】

「このタイトルが見えたかな？では魔法にかかったようですね…」  
「○夏休みが終わる頃、一人の少年が不思議な体験をする。注意・低年齢層向けの作品ですので、苦手な方はご遠慮ください。  
原案、夕波午後ノ著、（、）y・ 前トキしろつ

## 上 1 (前書き)

【お詫び】○作者の体調不良と投稿形式に悩んでいて、夏休み中の企画が遅れてしまいました。申し訳御座いません。○この作品は連載形式の短篇三部（上中下）の予定でしたが、読者の混乱回避の為、急遽連載形式に投稿にした作品です。管理人様に問い合わせたところ、「短篇三部は現在規約違反ではないが、当方としては連載を推薦します（省略内容）」との返答で、悩んだ結果、短篇一話を三分割、全九分割の連載投稿となりました。編集自体、分割にした程度で短篇用の執筆が反映されておりますので、大変読みづらいと思われませんが、御了承ください。

『魔法じかけの僕ら』

上

—  
—  
—  
—  
—  
—  
—

記憶の中で、誰でも忘れてしまった思い出があるような気がする。昔？ 今？ よく覚えていない。メリー・ゴー・ラウンドの様にぐるぐる回転させて、同時に上下に揺らしても思い出せない。頭の中では何となくうる覚えで、何かの記憶と混同してしまっているよ  
うな。

アルバムをめくってもダメ。それならって頭の中から記憶の保管庫海馬を抜き取り、おもいつきり振ったってカラカラと音立てるだけ  
で出てくるとは思えない。

夢じゃなからって記憶の扉を叩いても、引き出しを引いても浮かばないそんな記憶。そんな忘れた思い出。本当は誰でもあつたんじゃないか！？ でも、消えてしまったんだ……きつと。

\*

「ねえー、待ってよ」

仲良し三人組の中で、一番足の遅い慶太が二人に向かって言った言葉。

小学校最後の夏休みも残り僅か。十二歳の彼らは一生懸命遊んできたのだらう。日焼けした茶褐色の皮膚が物語っている。

前日の雷と雨が嘘のように晴渡り、この日は朝から夏模様。太陽が朝からギリギリと眩しく、蝉は大忙しだった。

午前中、学校のプールの後で三人は午後から出かける予定ではなかったのだが、何となく走りたくなったのだ。変なオリジナルな歌を歌い、変な奇声をあげ、太陽を捕まんとするかのようなジャンプ。

でも本人が思っている程、以外に飛んではいけない。しかし、ハイテンションにその身を任せるのは、ヘタな芸人より凄まじい。彼らにとっては何の変哲もない日で、いつもと変わらぬ帰り道。しかし、彼らの直感や感性には時には驚かされることが多い。それは突如としてやってくるのだ。

……ダツダツダツダツ、ピタツ！

突然、立ち止まったのは三人組のリーダー的存在、うさみまもる宇佐美衛。

おいーっ！

と、急に立ち止まった衛にツッコミを入れながら止まったのが、坊主頭の景山伸治。かげやましんじ先程からオリ歌を熱唱し、無意味な奇声を一人で発していたちよっとお調子者。二人は、地元のサッカークラブにも通っている。

ドツサツ、ズズズズー！

もの見事にヘッドスライディングで転び、眼鏡を衛の足元に飛ばしちゃったのは足の遅い慶太。こはやかわけいた小早川慶太だ。小早川、速そうだが遅い。

慶太は勉強は出来るのだがスポーツの類が苦手で、サッカーはもちろんやってはいない。

衛が立ち止まった所に、伸治が駆け寄る。

「うさっち危ねえ！俺がロナウジーニョ並みに俊敏じゃなかったら、ドーンだよ」

俺じゃなかったら 的な、よくある例えを言いながら。

しかし、そんな伸治の冗談や、慶太がすっ転んだ事にも衛はピクリとも反応しない。

そんな衛に伸治はキョトンとしながらも、衛の足元に転がっていた眼鏡を拾い、すでに立ち上って埃を払っていた慶太に渡した。

「大丈夫か慶太？」

「うん、大丈夫。ありがとう」

慶太は眼鏡をTシャツで軽く拭いてから耳に掛け、衛の顔を覗くと、何かに取付かれたように固まり、ジッと上を見上げている衛に気付く。

伸治と慶太は衛に声を掛けず、衛が見上げる視線の先に二人も顔を上げた。

衛と伸治は六年生の同学年の中でも背が高いほうで、その二人の身長はほとんど落差はなく、スポーツマンらしい。慶太は色白の顔に眼鏡。体は細くひよろりとしていて、二人より頭一つ低い。その三人が、まるでアスファルトの歩道から芽生えたつくしのように立ち並ぶ。

見上げるそこには奇妙な看板。

『館のカモ』

伸治は言う。

「や、か、……やかたのカモ？」

空かさず慶太が言う。

「違うよ伸ちゃん」

何故、ツッコまれたのか疑問の伸治。眉間に皺が寄り、片眉を大きく上げる伸治に向かって慶太は続けた。

「えっと……右読みだと思うから、“モカのやかた”って読むんだよ」

伸治の顔は真っ赤になる。

恥ずかしかったのか、伸治は腕を組み、顔を横に反らしながら小言を言った。

「チッ、ジョークだよジョーク。俺のセンスだよ」

慶太はチラツと伸治を見て微笑んだ後、また喋り続ける。

「右から読む看板なんて、きつと古い建物なんだね」

そして、小さく言った。

「建物ボロボロだしね」

三人の目の前にあるのは、洋風に作られた多目的スペースの小さな小さなテアトルである。

劇場やシアターなどをメインにしている、日本ではおもに芝居小屋の和風な作りで、同じく劇や映画などが鑑賞できた。それらは各地に点在していたが、現在ではその姿はほとんど見られなくなった。最近では、それに代わる公民館さえもあまり利用されなくなり、アニメを上映しようと宣伝したにも関わらず、来たのは女の子一人だったと言う話もよく耳にする。淋しいものだ。

さて、話は戻る。ボロボロに寂れ、煉瓦に蔓がはい回り、一部、風通しのよさげな穴が開いているのも見える。『館の力』の看板は焦茶色の一枚板に白く丁寧に書かれていて、その上には看板を照らすライトが三つ程出ているが、点灯するとは思えないほどだ。その看板の下には、左右に開く扉が二枚閉ざされていた。

それは小学生の彼らにとっても明らかに判別できる事で、興味本位なら恐らく心霊スポットにも成りかねない風貌である。

しかし、衛はそんな事とまったく違う感性で、その足は自然に建物の前と進んだのだ。

怖いもの見たさというのではなく、ましてや肝試的な発想でもない。まるで宝探しをするようなわくわく感、ドキドキ感である冒険心が芽生えていた。

「うさつち？ どこ行くんだよ」

思わずついて出た伸治の言葉。

「うさつちって呼ぶなよ」

衛から返事が返ってくる。それは、うさつちと呼ばれるのが嫌で

いつも伸治に言っている言葉。

何か妙な感覚を伸治は感じていたのだが、衛がいつものように言い返して来たことで、衛の不可解な行動と取付かれたように黙り惚けたいた恐怖心が安心感へと変わったのだ。

しかし、衛はズンズンと進んで扉の前に立つと、把手に巻かれていた錆びた鎖をガチャガチャといじり始める。

伸治と慶太は二人で顔を見合わせると汗って止めに入る。

「やめた方がいいよ。叱られちゃうよ」

「そうだ。うさつちやめろって！」

ガチャガチャと上に引つ張ったり、横に引つ張ってみたりとしてみるが、どうしても外れない。

伸治と慶太が衛の両腕を掴んでようやく止めると、衛は不満げな顔で扉を眺めて言う。

「くそっ」

そして、軽く扉を蹴ったのだ。

ドンッ！

すると軽く蹴ったにもかかわらず、ガラガラと音を立てながら鎖はすり落ちた。

力づくで引つ張っても外れなかった鎖が、何ともあっけなく外れた。

三人の驚く声と、普段、合わせようにも中々あわない足並みが、この時の後退りは不思議と揃う。

「おお〜〜！！」

そして次はおきまりと言うべきか、三人を誘うかのような扉。

ギギギイーン

上 1 (後書き)

○低年令層の作品で、携帯読者が大部分をしめるのに、長文で申し訳ございません。パケ代には十分お気を付けください。パパ、ママに携帯を借りて読んでね。

ギギギイーンッ

完全に開いた訳ではなく、ここからは自らの意志で扉を開けると言うような感じだった。もちろん、三人にはこの扉の意志に気付いているわけではない。

しかし衛は扉に手を伸ばし、恐る恐るその扉を引いた。

何故か止めに入った伸治と慶太は衛の腕を握り、ひっ付いたまま同じく引き込まれていく。

「お邪魔しまーす」

その声は低い。

すると三人は以外に明るい中を見ると、自然と恐怖心が消え、見入ってしまった。

「へえー。以外にちゃんとしてんな」

伸治が言うように、確かに屋内にも多少ボロがあるのだが、蜘蛛の巣もなく、埃まみれになっているわけでもない。何枚か壁に貼られたポスターがあるが、古いもので、彼ら三人が飛び付き目を輝かせる代物ではない。さらに、真夏の昼にも関わらず蒸し暑いかと思いきや以外に涼しい。

広いロビーの中央には木枠の上にガラスが貼られたチケットの直売店があり、そこから二股に別れるようになっていて、奥に二つの入り口が見えた。衛は何気なくそこに目をやる。

『ターアシ』 『場劇』

と、それぞれに書いてあった。

伸治と慶太はキョロキョロ辺りを見渡すが、衛の側からは離れず

にいる。

「なあ、うさつち帰ろうよ」

「うさつちって呼ぶなよ」

慶太も言う。

「衛くん。帰ろ……」

無視したわけではないのだが、衛はまったく帰る意志はなく、慶太の言葉に反応できないでいた。

衛はどちらかの入り口に入りたくてウズウズしだし、その足はたまらず前に進む。

「よし。まずは劇場からだ」

二人から待ったがかかる。

「おい。待ってって」

「衛くん！」

その時、何か変な音が近づいてくるのを三人は聞き逃さなかった。

コツツ、コツツ……

床板を鳴らす音。それは、劇場やシアタールームから聞こえてくるのではなく、ロビーの端から聞こえ、徐々に大きく聞こえてくる。三人はまたも固まってしまい、声も出ない。

お化けと言う恐怖と、怒られる恐怖がマーブル模様のようにゴチャゴチャに入り交じる。

すると音が止み、怒鳴るわけでもなく、うらめしやくと言うわけでもなく、こう言った。

「ほほう。久々の悪戯ツコが迷い込んできたの」

そこには毛糸のニットを被ったション・コネリーばりのお爺さんが立っていたのである。この暑い夏にシャツの上に茶色のベストを着て、カーキ色のストラックスに革靴。見るからに暑苦しいが、本人はいたって涼しげな顔。

しかし、今の三人にそれは関係なく、人が居たのかという思いが

強かったのだ。

すると、賢い慶太はお爺さんの前に走ると、

「黙って入ったりしてスミマセンでした。すぐに帰ります」

ビシッと丁寧に謝りだし、そして、クルリと振り替えると、二人の腕を掴んで外へと引っ張りだしたのだ。

「二人とも帰るよ」

伸治はもともと気が乗らなかったもので、慶太の言うようにおとなしく出ようとしたのだが、納得しなかったのは衛だった。

「衛くん。ダメだよ」

慶太は力いっぱい引っ張るが、ひ弱な慶太では中々に連れ出すことは出来ない。

伸治はふざけたり、イタズラしたりと先生にも静かにしなさいとか、通信簿には落ち着きがないとよく書かれるのだが、以外に陰気な雰囲気にはおじ気付いてしまう性格で、この時は慶太の意見に賛成と言わんばかりに衛の手を引いた。

「そつだ。行くぞ！ うさつち」

すると、二人の掴む腕を力一杯振り解いた。

「う、うさつちって、よーぶーなー」

衛は口数は少ないのだが、爽やかな顔には似つかわなほど泥臭く、外で走り回るのが好きで、冒険心や好奇心が旺盛で、しかも、こうと決めたら頑として動かない性格。

こうなってしまうと、ダメだと言うのは二人とも知っているので、二人が選択するのはいつも、『ほつと置いて置いていく』なのだ。

もちろん衛自身もこうなると二人は自分を置いて帰るだろうと言うのは分かっていた。しかし、状況が状況だけに伸治と慶太はどきまぎしていたが、突然、お爺さんが語り掛けてきたのだ。

「わしゃ構わんよ」

確かに生きた人間が出てきたのには一安心したのだが、見た目ゴツくてデカイお爺さんがノツシリとボロ屋敷に姿を表したのは、下手なゴシップホラーよりも恐い。次は殺されてしまうような気がし

てならなかったのだ。

伸治はただ雰囲氣的に慶太に合わせていただけで、少なくとも慶太はそう思い始めていた。

腕を振り払った後、衛は慶太の目を覗く。眼鏡から覗くクリクリした可愛い目が子猫のように怯えて震えているのが分かる。そして伸治の目を覗く。伸治はそのまま悪ガキっぽい顔なだが以外にスマートな顔。それにマツチした切れ長の目。しかし、何らかに恐怖はしているが、その目には怯えは見えない。

衛は二人の目を何度か見比べ、伸治に目を止めると。

「いや〜ん。見つめないで」

などとほざいて、内股と頬に手を添えて恥じる素振りを見せる。

明らかにふざけている。そんな伸治を差し置いて、衛は本気で心配する慶太の両肩に手を添えて言った。

「大丈夫だよ。ケイが思ってるような事はしない人だと思うんだ」

「でも……」

それを恨めしそうに伸治が、また腕を組んみ、膨れっ面でつぶやく。

「ジョークだよ。俺も心配してるっつーの」

そんなやりとりを見ていたお爺さんはノシノシ近寄ってくると、

慶太の頭を優しく撫でながら衛に向かって言った。

「うーん。今日はこの子に免じて帰ってあげなさい」

「あ、でも……」

衛が何か言おうとしたその時、お爺さんは三人の背後から黒い影が細く伸びてくるのに気付く。それは三人が忍び込んだできた扉が少しだけ隙間が空いていて、光が微かに道筋を作っていたのだが、その光を遮る不思議な影。一見、人間の腕のように見て取れるのだが、煤のように黒くヒョロヒョロと漂うように三人を掴もうとしていた。それに三人は気が付かない。

するとお爺さんは人差し指を一本口元に立てると、クイツと指を一捻りする。

ドンッ！！

三人は一斉にビクつき、そして振り向く。しかし、扉に挟まれたその影は、ふわっと煙のように立ちこめると一瞬にして消えてしまい、三人の瞳に映る事はなかった。

危機は三人が知らぬ間に去ったのだが、扉が大きく音を立てて閉じた事により、伸治と慶太にとってはさらなる恐怖が植え付けられたのである。

「うおおおっ」 伸治は情けない声を上げた。

「ほっほっほっ。悪戯な風が吹いたの」

お爺さんはそう言いながらなんとか誤魔化すと、先程から何か言いたげな衛に向かって、捻った人差し指をそのまま口元にゆっくりと立てる。そして、

“ シー—— ”

と静止を促し、首を静かに横に振った。

「きみの好奇心は分かったよ。次は君の好きな時に来なさい。いつでも案内してあげるから」

そう言われてしまえば、衛も渋々引き下がるしかなかった。

「お爺さん。約束だからね」

体はゴツイが笑顔は優しい。

「ほっほっほっ。約束はやぶらんよ」

三人は扉の前に立つと、お爺さんに頭を下げ、

「勝手に入ったりしてごめんなさい」

と、きちんとお詫びをしたのだった。

そして、三人の手の平が扉を開く。

ギギギィーッ！

魔法じかけの僕ら

ギギギイーンッ！

まだ日差しが高く、暗がりに慣れた三人には強烈な光がその目を直撃してくる。三人は目を細め、手の平でその顔を覆った。と同時に焼き付ける熱さが三人を襲う。まだ夏だと言うことを太陽に知らしめられる。すると、全身から汗がじわじわと滲みだす。

「あちいー」

「なあ、まだ時間あるし家でゲームでもしようぜ」

三人はむせぶ暑さのなか、『館のカモ』に入る以前のように元気に駆け出していった。

走って帰る最中、衛は考えていた。

（前から通ってた道だけど、今まで気にも止めなかった。て言うか、あんな建物あったっけ？ しかもなんで今日は立ち止まったりしちやっただらう？ 不思議だなんて、まさか魔法……？ んな訳ないか）

鋭い！ が、事の大きさにまったく気づいていない。直感はあるが、その後が楽観的すぎるのは衛のメリットでもありデメリットでもある。

彼らの姿が館から見えなくなったその頃、彼らを送り出した扉は硬く閉ざされたのだった。

ギギギイーンドンッ！

外界の光が遮断され、薄明かりの中で、お爺さんが微笑む。

「約束はやぶらんよ。きつとね……」  
と同時に、お爺さんはあの黒い影の事が頭に浮かぶ。  
「しつこい奴よの。しかし邪魔はさせんよ……ほっほっほっ」  
お爺さんはそう呟くと、コツコツ杖の音を立てながら、奥の方へと姿をけしたのである。

時に、駆け出して帰ってゆく衛は、自分に魔法がかけられている事などまったく知るよしもなく、はたまた目くるめく不思議な世界が衛を包むことなど微塵も思ってもいない。

しかし今、この館に居るお爺さんと魔法の杖だけは知っていたのだ。

衛にかけた、ほんのちよつとの魔法の事を……

\*

……モ力の館に足を踏み入れたあの日以来、衛は館に行かなくなってしまう。学校のプールや伸治、慶太とも遊びに出るたび何度なく前を通るのだが、館の中に入るのを躊躇していた。

そして夏休みも残すは、たったの数日になってしまった夜のこと。頭の変なモヤモヤは衛を悩ませ、ベッドの上で何度も芋虫のように藻掻せる。

サッカーボールをコロコロ転がしてみたり、部屋に貼ってある四枚のポスターを眺めたりする。

一枚のポスターには、凄まじいまでに白い歯をむき出しに、素晴らしい笑みをこぼす特注特大の神様ペレ。

ドアを挟んでベッケンバウアー。その隣に兄貴が悪戯で張った荒選手のイバウアーに2のジャツバウアーが小さく張ってあるが、これは含まれない。その隣が、クリスチャン・ビエリ。

そしてベッドに寝そべると、天井には一枚特別なポスター。衛が

憧れ必死に実力で掴んだ、同ポジションでもあるティエリ・アンリ！の隣には、やはり悪戯で張ってある歌手の杏のポスター。ちよっとおやしギャグだし微妙だ。

それらをぼーっと眺めたりと落ち着かない。ゴロゴロ転がる。

その時、自分で意識したわけではなかったのだろっが、何気なしに後ろポケットに手を入れたのだ。すると、何かに触れた感覚がある。

ガサガサッ

「ん？ 紙？」

衛はニヤリと微笑んだ。

「ラッキー！ お金、ゲット……あれ？」

何やら衛が想像した物ではないらしい。その手には半分におられたお金サイズの紙。

「……なんだこれ？」

ベッドに寝そべったまま、おもむろに広げてみる。

『モカの館ご招待チケット

本日 日 午後・八時にてお待ちいたします』

衛は飛び上がり、カレンダーで日付を確認した。

「……日」

何度もそのチケットとカレンダーの日付を確認する。

「……今日じゃん！」

時計を見る。

『07:40』

「おっ！ やばっ、遅刻だ」



ギギギイーッ

あの日と同じボロい音。

すると、中のロビーはいくつかライティングされていて明るかった。

衛を待ち構えて居たかのように、コツコツと床板を突いて歩く音。

「待ってたよ。衛くん」

衛は照れ臭そうに、頭を撫でる。

「って、俺の、あの、な、名前って言いました？」

突然気付く。

「ほっほっほっ。気にしなさんな」

その時、また何気なくポケットに手をつ突っ込むと、チケットに気付いた。

「あ、あの、これ」

お爺さんは細い目を大きく見開くと、それを確認し、ニコニコと微笑んだ。

「うんうん。ちゃんと届いていたの」

「……届いた？」

衛には何の事だかさっぱり理解できない。

「気にしなさんな。それより……」

お爺さんは、こっちへこいと衛を手招きする。

しかし、この手招きから物語が始まって行く……いや、衛が館を見つけたときからお爺さんの魔法がすでに始まっていたのかもしれない。

そして、衛は気付くだろう……

きつと。



中(1)

『魔法じかけの僕ら』

(中)

モカの館に不思議と引き込まれたような気がする。チケットがあったからじゃない、館が気になったからじゃない。何かの力が引き付けたのだろう。それは、お爺さんの魔法だろうか？

衛自身、そんな事だとは考えてはいなかった。

そうして入ってしまったモカの館。館に来るまで何度か不思議なことがあったが、これからさらに不思議な事が起こるのだ。

それを暗示するかのようなお爺さんの怪しい手招き。

しかし、衛は動かない。

なかなか、足を動かさない衛に強く手招きする。

何だか衛には疑問だらけ。

「最近の若いのは感性がいま少したらんの」

衛は思う。

(ニコニコ顔で言うこときついな、このジジイ) すると、

「ほっほっほっ。そのぐらいで丁度ええ」

衛はとっさにヤバイとこに来たと、冷や汗を垂らし背筋を凍らせた。

取り敢えず、お爺さんの後ろをついて行くとロビーの端にはドアがあり、倉庫になっているようだった。

お爺さんはそこから何かを取り出して置く。

ゴトッ

鳥かごが置かれる。中にはオウムが一羽、おとなしく入っている。

「今から次々と友達を出すから、ロビーの真ん中に運んでくれんかの」

「あ、はい」

衛はトボトボと運んで、次のを待つ。

ゴトツ

次はウサギ。トボトボと運んで、さらに次のを待つ。

バウツ！

「ん？　なんか違う」

そして、現われたのは犬。デカイ犬。セントバーナードが出現。さすがにゲージではなく、そのまま又ツと現われた。

衛は思う。

(モカの館は、動物園か)

すると、

「ほっほっほっ。ちよつと違うな」

またも背筋を凍らせた。

犬、鳥、兎をロビーに運び終わるとお爺さんはこう言った。

「準備は大体終えたの。すまんがもう少し待ってくかの衛くん」

「あ、はい」

すると間もなくだった、扉が開いたのは。

ギギギイーン

誰か来たのは衛も気付いた。一瞬、頭に浮かんだのは伸治。もしくは慶太だったが、そこに現われたのは予想を反していた人だった。艶々の黒髪ロングに白い肌。細くて折れそうな体の清楚の雰囲気。で可愛い、いや、美少女と言言葉が似合う女の子。年は衛と同じ

くらいだが、大人っぽく見える。

思わず衛は頬を赤らめて、ブルブルと震えだす。それは、全身に電気が走る感覚だった。

少女はお爺さんを見つけると、ニコニコ微笑んで近寄り、その大きな胸に飛び込んだ。

「ほっほっほっ。よく来たね、美琴ちゃん」

お爺さんは、その艶々の髪を優しくなでるとさらにこう言った。

「よし。これで主役達が揃ったの。二人ともチケットを」

そう言いながら、美琴にウインクをした。

ガチガチに固まった衛は、カタカタとブリキのおもちやのようにチケットを取り出すと、震える手でお爺さんにチケットを手渡す。

ヘンテコに動くおもちゃのような衛を不思議そうに見ていた美琴が、くすくすと可愛らしい笑顔を見せると、衛はさらにガチガチになっちゃった。

すると声もなく笑っている美琴の前に、お爺さんは衛のチケットをヒラヒラとヒラ尽かせて美琴に気付かせると、指をツンツンと指し示たのである。

慌てる美琴は、小さなポーチから同じチケットを取り出したのだ。ガチガチに固まっていた衛だったが、なんか二人の行動は不可思議でならない。

お爺さんは二人のチケットを指に摘んでライトに透かして眺めると、ぼそつと呟いた。

「この子は耳が聞こえんのじゃ」

お爺さんの声は聞こえてはいないのだろうが、美琴は衛を笑顔で見ると、すっと頭を下げる。

それは、衛に対して“よろしくね”と言ったような気がしていたが、その衛の思いは強ち間違っではない。

「こ、こちらこそ、よろ、よろしく」

衛はそのほほ笑みにガチガチになりながらも、聞こえるはずもない言葉を返したのだった。

その二人の行動をちらちら見ていたお爺さんは、ぎこちない衛を遠目から眺め、くすぶる笑顔で言う。

「さあ、お二方。準備はよろしいかの？」

ガチガチ衛もすつと我に返ると、無意識にお爺さんの左隣に立つ。美琴は逆の右側に。

お爺さんは二人の目の前でチケットを半分に破くと、二人にその半分の半券を渡した。

二人はそれをぐつと握りしめ、顔を見合わせる。

二人の笑顔を見つめたお爺さんは、大きく息を吸い込んで、手に持っていた杖を掲げた。しかしその時、衛の足をくるくる回る小さな物体が現われると、次にはさらに大きい物体が追い掛け回す。猫とネズミの追い駆けっこだった。

「おーおー！ なんだよ」

衛はびっくりして、足をバタ尽かせ、くねくねと交わすように動きだす。

「こら。お前達、遅刻じゃぞ」

お爺さんは二匹を怒鳴り付ける。

すると、人の言葉が分かったかのような二匹は動きを止め、ネズミは二本立ちで辺りをクンクン嗅ぎ回り、猫は正しくお座りしながら、手の甲をペロペロ舐めだした。

美琴はそれを楽しそうに眺め、満遍の笑み。

するとお爺さんはチツチツチツと軽く舌打ちし、片眉をクグツて上げながら二人を伺った。

「よーし！」

と、再度振り上げられた杖は、今度は止まる事無く真直ぐ床板を一回叩いた。

トンッ！

……何も変わらず静かなロビー。お爺さんは二つの目をキョロキ

ヨ口動かす。衛、美琴は首を振って見渡す。ドア、天井、床板。そして、動物。

ふあ〜

セントバーナードが大きくあくびをするだけで、何も変わらない。

うっん！

お爺さんは何事もなかったかのように咳払いをすると、両目を瞑り今度は床板を二回軽く叩いた。

トンツトンツ！

すると次の瞬間に、叩いた床から煌びやかな光が広がりだし、お爺さんや美琴、衛、動物達の足元をキラキラと照らしたし、その光はどんどん勢いを増して床を輝かせ、壁を輝かせ、天井を輝かせていった。

衛も美琴も自分の目を疑った。目を擦る。しかし、現実。次はぽっぺをつねる。

「いつてえ〜」

やはり現実。すると、オウムや兎、大きなあくびをする犬までもが人の姿に変わりだし、ネズミも猫も人の姿に変わり出したのだ。

オウムはスマートな男。兎は白肌の女性。犬は大きな男にまる目のサングラス。ネズミは怪しげな女性に猫はツリ目で細面な男。それぞれ清楚なスタイルで姿を変えた。

すると煌めきが一層増す中、お爺さんは二人の服に人差し指で軽く触れる。

すると見る見る内に、衛はタキシード姿に変貌。美琴はシンデレラのような見事な純白のドレスに、薄らと化粧が施され、ふくよか

な膨らみの唇にピンク色のルージユと頭には輝くティアラが装飾されたのだった。

衛は自分の変貌した姿よりも、見る見る美しくなる美琴に見事にハマってしまったのだ。

「あへえ〜」

そんな衛の変な目にも気付かず、その場でくるくると回りだす。すると、お爺さんが美琴に聞いた。

「ワシの声が聞こえるかい？」

無意識にピタリと止まり、静かになった。

全身からジーンとするのを感じ、徐々に瞳が輝く。

そのまま動かなくなったと思った途端、美琴はお爺さんの大きな胸にまたも飛び込み、ぎゅーっとな顔を沈めてゆく。

「ほっほっほっ！さあさあ、顔をお上げ」

そつと美琴の肩に手を添えると、お爺さんは親指で涙を拭う。

「ほっほっほっ。せつかくの化粧が台無しじゃ」

お爺さんは大きな体をぐつと下げ、その体を屈ませると美琴に言った。

「さあ、その可愛い声を聞かせてくれんかの？」

……と。

中(2)

お爺さんは美琴に、やさしく囁きかけた。

「さあ、その可愛い声を聞かせてくれんかの？」

美琴は口を開け一瞬躊躇ったが、大きく深呼吸するなり、

「お爺さん！　ありがとう」

ちよとたどたどしくもあるが、なんとも言えない透き通るような声をあげた。

衛はまたも全身に電気が走る。

「うっうっうっ」

そんな衛を見た美琴は耳が聞こえ、声がちゃんとだせる喜びに思わず衛に抱きついたのだ。

衛、ノックアウトの瞬間。頭から蒸気機関車並みの煙が立ちこめる。これは、お爺さんの魔法によるものだ。

すると次の瞬間、大きな音が扉から聞こえる。

キキィーガッチャン！

そこにはお爺さんとお婆さんの数十組の夫婦が列をなして待ち並んでいおり、扉が開くと一斉に雪崩込んでくる。

するとどうだろう。入り口に入った瞬間！　老夫婦達は若返り、男爵風と貴婦人に姿を変貌させたのだった。

待ちに待ったと言わんばかりに入ってくる夫婦に、犬だった大男がチケットを切りだす。どうやら受け付け人のようだ。

それに見とれていた二人の後ろから、低音の渋いダンディーな声で、

「レディー スアンドジェントルマン！　今宵、モカの館にお越し頂き誠に有難う御座います。殿方と御夫人方々、どうぞごゆるりとお過ごし下さいませー！」

今までお爺さんが立っていたその場所には、シルクハットにタキシード。ひらめくマントにステッキという出立ちの男爵が立っていた。

「私、当館支配人のモカにございます」

するとどこからか、優雅な音楽が流れだし、シアターと劇場の入り口がひとりでに開いたのだった。

中はもちろん豪華絢爛。劇場はこの建物の寸法に明らかに合わない広さ。さらに高くそびえ立つ客席。まるで豪華なオペラハウス。シアターはこれまた見たことのない程の大型スクリーンがドーンと見て取れる。

逆に二人は引け目を感じてしまうほどだった。

紳士風なあいさつでハットを脱帽し、腕を直角に曲げて頭を下げていた紳士な男は、すつと顔を上げると、二人にそつとウインクを交わした。

変貌しているが、間違いなくお爺さんだった。

その時、二人の夫婦が衛と美琴の脇を通り過ぎるときに言い放った。

「まあ。魔法なんかじゃないわ。本当の若い人たちなんて何年ぶりかしら。お似合いのお二人」

「おー。確かに見事な二人。素敵なお爺さんと姫君だ」

二人は顔を見合わせると、互いに頬を紅らめた。

「ささ、お二人さん。シヨ一の始まりですよ」

モカと名乗るお爺さんだった紳士は、長く真つすぐ腕を伸ばし劇場に手を向ける。

「まずは、こちらを御覧あれ！」

\*

モカに言われるままに、二人は劇場に足を運んだのだが、案内されたその場所はなんと特等席。普段はみな平等なのだが、この日の

若い二人は特別なゲスト扱いで、魔法で若返った老夫婦が言ったように、まるでどこかの皇子と姫君が観覧にでも来たかのような賑わい。拍手喝采の雨あられて迎えられたのだった。

二人は照れながら、その特別な席へと腰を落とす。大きな赤い椅子。金の縁取りを施し、クッションはふかふかだった。

二人が腰を落とした途端に、少し照明が落とされる。ザワついていた観客はそつと静かになるり、息を呑む。

すると中央のステージにまばゆいばかりのライトアップ。するとモカがステージの真ん中に立ち尽くし、大きく叫んだ。

「今宵、地中海より招きたるは、美しい歌声で知られる人魚姫。サラ君に御座います」

パチパチパチ……

これまた拍手喝采。

衛と美琴にとっては、初物尽くし。特に美琴は人魚が見れると知ると、どきどき胸をときめかせ、瞳は潤んでキラキラと輝きだした。ステージに立つモカは、杖をクルリと回し、ステージ床をトンと叩く。するとどうだろう、見る見る内にステージに水が溢れ、小さな海が現れる。さらに海の中央から、すつと岩が浮上した。

小さく静かな海。

すると、海の中から物凄い勢いで何かが飛び跳ねた。

「うおつ。デカイ飛び魚!？」

衛の例えにもならない言葉に、美琴が膨れっ面になり、衛の太ももをつねった。

「いつ……いつ」

「人魚のお姫さまなんだから、変なこと言わないでよ」

申し訳なさそうに、しゅんとしてしまう衛。しかし、美琴は衛にニコツとスマイル。それは美少女コンテストに推薦すれば、間違いなくグランプリだろう笑顔を見せたのである。

「せつかく楽しいショーなんだから、喧嘩しないで楽しも。ね！」  
衛にとって人魚姫などどうでもよかった。目の前の美琴をずっと見つめてたかった。

サッカークラブのエア的な存在で、爽やかでクールな彼は女子にモテるのだが、極度のシャイ。女子の前ではモノ言えぬ銅像となってしまう程。そんな衛だけに、美琴の顔をじっと見つめ続けるような勇氣はないのだ。

仕方ない。暫し、人魚のオンステージを拝見する事とした。

人魚は中央の岩に鎮座すると、玉虫色と言うのだろうか、もしくはオーロラか虹色と言うのか、光のスライドで鮮やかに輝くスラリと伸びた尾。腰から尾の先まで煌びやかな鱗がまばゆく光る。吸い込まれそうな青い目に金色に輝く美しい髪は、はだけた胸を隠し、そこからさらに腰まで長く伸び、肌は美琴に引けをとらない程、透き通る白い肌。それは絶世の美女と言うに相応しい容姿である。  
しかし衛の頭の中では、美琴が一番だと一人で納得していた。が、そんな事は、あくまで衛の個人的な事。ステージは始まった。

「 a h a h h ……」

静かに始まった人魚の歌声は、肌のように透き通った声で、頭の中にまで入ってくる。さらに体中隅々まで浸透していき、まるで穏やかな海の底に引き込まれていくような感覚。それは完全に癒しの世界。衛や美琴も完全に癒されていくのだった。

――その時、外の闇の世界に蠢く不気味な影が、モカの館の外壁を這いずり回るようにへばりつき、中の様子を伺おうとしていたのだった。

それは、これから始まる何かを暗示していたのである……

美しい人魚の歌に観客全員が聞き惚れている最中、モカはステー

ジ裏に仲間を集め、なにやら話をしている。

「よいか。気付いているだろうが奴らが館の中に入ろうとしている」  
ウサギにオウム、犬、猫、ネズミは黙ってモカの言うことを聞いている。

「彼女に邪魔はさせないように……」

\*

そこは暗やみ。光る水晶玉。全貌は伺えないが、怪しい場所には間違いない。

その怪しい場所には、水晶の光で微かに浮かぶ魔女の姿。モカの館の様子を覗き見ていたのだ。

「モカはどうする……」

何かを企む魔女は、ひっそりと笑った――

その時、丁度サラの歌が終わったらしく、モカ達の耳をつんざくような激しい拍手が客席から飛んだ。

ブラボー！ ブラボー！

サラは客席に向かって丁寧な一礼をした後、客の拍手に答えるように笑顔で手を振っている。そして彼女は小さな海に飛び込むと、一度浮き上がり、さらに手を振り、そのまま海の底へと潜っていったのだ。

これにて煌びやかな人魚のショーは、幕を閉じたのである。  
するとステージの小さな海はその姿を消し、代わりに現われたのはモカだった。モカの登場に、再び招待客の拍手喝采が巻き起こったのである。

中(3)

モカの登場に、再び拍手喝采の嵐。

鳴り止まない拍手の中、モカはマントを翻し一礼。

「いかがでしたでしょうか？ 次は、シアターにて映画をお楽しみくださいまし」

全員モカの誘導に従い、シアターホールに移動する中、衛は動かなかった。理由は一つ、美琴が動かないからである。

美琴は完全に人魚の虜になり、瞳を潤ませ胸に手を当てて、残る感動の余韻にじわりじわりと浸っていた。

すると突如、美琴は衛の腕を強引に引き、為されるがままの衛の手のひらを自分の胸に当てたのだ。

「いっ……！！！」

声にならない声を出し、衛は固まる。

こんな時の女の子は大胆になれるのだろうか？

美琴が他と違うのかは分からないが、この時は感動した溢れんばかりの思いと、美琴の性格の二つがそうさせたのだろう。

「分かる？ 私、ドキドキしてる」

この数時間で衛は何回固まったのだろうか。しかし、徐々に慣れてきた衛は、とろけそうな表情で美声の余韻に浸る美琴の胸から、何とか動く自分の腕を、ゆっくりとそろりそろり引き抜いた。

——ハァー。

魔法じかけの僕ら

安堵のため息。そして、そのままスライムのようにへニヨへニヨになった衛は、椅子から滑り落ちていた。

「ハァー。とても素敵だった……じゃあ、映画にいきましょう」

そう言っ て衛の方に振り向いたのだが、既に姿がない。椅子から滑り落ちていたことに、美琴は気付くよしもなかったのだ。  
「あれ？ どこいったの……」

\*

滑り落ちていた衛はなんとか息を吹き返し、遅れ馳せながらも美琴と二人でシアターホールに辿り着く。

そこにはモカが待っていて、またまた特等席に案内されたのだった。

シアターホールは劇場と異なり、横に長く客席が敷き詰められているため、最後列の中央が特等席になっていた。客席はその特等席のある縦列を中心に程よく左右に曲線を描き、巨大なスクリーンを取り囲んでおり、丁度良い高さに設定された特等席は何者にも邪魔されることのない良い眺めである。

すでに照明が落ちているホールはプラネタリウムのような世界。暗いホール中に、きらきらと輝く光の点が浮いていて、それらは時にふわふわと時には素早く動くのだ。

一つの光がふわふわと美琴に近づくと、美琴はその発光体を両手の上に受けとめ、その光の粒を眺めた。

「まあ、素敵！」

美琴の手の平には、小さな妖精がはつきりと見て取れる。その妖精はエメラルドに輝くドレスをヒラつかせると、ちよんと腰を落とすと素早く飛び立っていった。

ビーーーーーー

上映の合図になる。美琴のドキドキは止まない。

3……………2……………1……………

カウントが終わったスクリーンには何も変化はなく、静かで音がない。そこには、鮮やかに彩られた一面花畑の映像。

衛と美琴はスクリーンをじっと見入る。

ずっと花畑。

その後、五分たっても何も変わらず、衛は飽きてしまっていた。

「なんか眠くなりそう……………」

衛の目蓋が半分落ちそうになっていた時、どこからか微かな音が聞こえてきた。

ポオーーーーー

「……………ん？」

辺りをキョロキョロと見渡すが、どう考えてもスクリーンから聞こえてくる。

変化のなかった映画だが、ようやく物語が始まるうとしていたいたので、衛は目をパチパチさせると姿勢をただし、スクリーンに集中した。

シューーっという音が聞こえてくると、花畑の真ん中に何かが這って来て、それはドンドン手前に押し迫ってくる。

「線路？」

そう衛が呟くと、それは一気にスクリーンを突き抜け、客席に飛び出してきた。

「うおおお！」

スクリーンを飛び出してきた線路は衛や美琴の体を透けてゆき、何処までも続いていく。

それは、まるで昔流行った立体映画のようだった。

ポオーーーーー

先程聞いた音。しかし、明らかに大きくなっている。

ポツポツポオーーーーー!!

蒸気機関車の音。だが、スクリーンから、いや、正しくはスピーカーだろが、それとも異なる。

じゃあ何処からだろう……

プフオーーーーー!!!

後ろからだ!

衛と美琴が振り返ると、時既に遅し。目の前には実物大の蒸気機関車が突っ込んできていた。

衛はとっさに両腕で顔を覆い、美琴もまた、手の平で顔を覆った。機関車の勢いは客席に物凄い突風を吹かせ、衛の髪をかき乱し、さらには美琴の艶やかな髪をもなびかせたのである……

\*

「……ねえ。大丈夫?」

美琴は小刻みに震え、恐怖に顔を覆った手の平を除ける事が出来ずにいた。

しかし、暗やみに響く衛の呼ぶ声。

その声に、美琴は思い切って顔を上げてみた。

一一一一ん!

目の前は真っ白。それは、眩しさのせいだと分かる。  
次の瞬間、心地よい風が美琴の頬を撫でると、眩しさに眩む目が  
徐々に慣れてきた。

衛の顔が見える。しかし、シアターホールではない。衛と美琴は  
向かい合うように座っていて、明らかに風景が違う。

衛はキョトンとする美琴に笑顔を見せると、左手の人差し指で“  
右を見て”とツンツンと指し示す。

美琴の頭の中は、迷宮化。何が何やら訳が分からなくなっていた  
が、衛が指し示す先に視線を向けると思わず絶句してしまった。

「素敵ー！ー！」

窓の外は一面花畑。見渡すかぎり花畑。地平線の向うまで花畑。  
それは左右共に、機関車を挟んで広がっていた。

「どうやら、僕達は映画の中にはいつちやったみたいだね」

衛は感動する美琴に、そう囁いたのである。

機関車の中には、もちろん衛や美琴だけではなく、招かれていた  
客人全てが乗車していた。モ力と仲間達は、シアターホールでお留  
守番。しかし、衛と美琴の姿はスクリーン映し出されている。そう、  
映画の主演は衛と美琴という粋な演出がなされていたのだ。

もちろん当の本人達は、そんな事になっているとは知らない。映  
画の観客はモ力と仲間達。機関車に乗車した者達は、思い思いに優  
美な時間を過ごしていたのである。

しかし、客人が機関車で旅している間も、あの黒い影はさらに数  
を増やし、館を埋め尽くすように壁や屋根にまでへばりついていた。

「……ほほう」

モ力は館にへばりつく影の数が増した事に気付いていたのだが、  
至って冷静。男爵風に伸ばしたヒゲを軽く撫でていた。

「魔法の使い、クロル共が騒がしいの……」

今すぐ何か起きてても、おかしくなかった。しかし、モ力の魔法  
で中にはいれず、怪しい影は館をぐるぐる這いずり回るしかない。  
だが、魔法の力で放たれた影はどんどん数を増やし、力を増し

てくる。

今は余裕のモカも、いずれは戦はなくてはならないと感じていたのかもしれない……

きつと。

――――  
――――  
――――  
――――  
―――― 『魔法じかけの僕ら（中）』 完。  
下巻へつづく。

下〔1〕

『魔法じかけの僕ら』

〔下〕

――

幻想か？ 夢か？ 一面花畑の世界は魅惑の色を彩し、その薫は人の心を癒していた。

窓の外に身を乗り出して、花畑を嬉しそうに眺める美琴を、ニコニコ微笑んで見ていた衛。

その衛の頬に一瞬何か着いたのを感じ、それを指で拭うって確認する。

それは水滴だった。

「……雨？」

窓の外を眺めると、一辺の曇りもない青空。雨など降るわけがない。

しかし、窓の外に身を乗り出していた美琴の異変に、衛はその時気付いたのだ。

（泣いてる）

言葉はでなかった。

すると美琴は体を車内に戻すと、さらにシクシク泣きだしたのだ。尚更、美琴にかける言葉が出なくなる。しかし、それでも何度声を出そうとするものの、やはり言葉がかけられない。

何故泣いているのだろうという疑問は、衛の頭の中から吹き飛んでいた。

どうする事も出来ずに、オドオドする衛に気付いたのかは知らないが、美琴の方から喋りだしたのだ。

「私……私ね、初めて歌を聞いたの」

まだ少し涙が零れ、体は震えているようだが、それに負けずと口調ははっきりとしている。

だから衛は、黙って聞くことにしたのだ。

「最初から聞こえなかったわけじゃなかったんだけど、まだ幼かったから歌って解る頃には、私から音がなくなっていて」

話したことで徐々に落ち着いてきたのだろう、止んだ涙を拭い、俯いていた顔を上げ、窓の景色を眺めはじめた。

「最初は、なんて素敵なの！ って思ったの。人魚の綺麗な歌声に、機関車から聞こえる蒸気の音や、お爺さんの声……」

この時の美琴の横顔は、長い髪が風になびいていて、何う事は出来ない。

「でも、お爺さんの魔法が解けたら、また音の無い世界になっちゃうんだって。そう考えたら、聞こえなくなっちゃってよかったのになって思ってしまったの」

美琴は高ぶる感情からか、涙を流す代わりに膝元のドレスを力強く握り締める。

「そんな思いが、ゴチャゴチャになっちゃって……」

これは、このままスクリーンに写しだされていて、ウサギやネズミ、猫にオウムは大粒の涙と大きな声で泣いていた。もちろん大男になった犬も。モカは壁に持たれてハットを深々と被り、その目を隠すように俯いている。

その時衛は、そんな美琴に何もしてやる事が出来なくて、悔しくてたまらなくなっていた。

美琴はなびく髪を指で拾うと耳に掛けながら、衛の方に顔を向け、真っ赤になった目の淵と潤んだ瞳で衛を見つめる。最初からしっかりしている子だったが、さらに大人になった感じがする美琴。

すると、吹っ切れたのか、急にニコツと衛に微笑む。

「ああ、泣いてスッキリした。もう大丈夫！」

まだ、目の淵が赤く腫れていたが、つい先程まで泣いていた美琴とは打って変わり、はしゃぎ回っていた時のような無邪気な顔になると、衛を何とも言えない感情が込み上げてきて、握りこぶしを掲げ、大きな声を上げ座席から立ち上がったのだ。

「しゃー！ー！ー！」

なにが、しゃー！ー！ー！ なのかよく分からないが、シャイな小学男児の目一杯の感情表現である。

映画の観客、つまりモカ一行は拍手喝采。

顔を俯かせていたモカの表情は伺えないが、口元は微笑んでいた。その時、モカは静かに指を一捻り。

すると車内から見えていた花畑が一変！ 突如として、暗やみに埋もれる。しかし、よくくもらして観ると、そこは宇宙空間の真っ只中。

「まあ素敵！ 銀河鉄道の世界みたい」

やはり無邪気な美琴にもどったようだ。とりあえずは安堵の衛。と同時に衛はは思う。

（いや、銀河 道9 9のようだ……） 何故、その年で知ってるんだ！とツツコミを入れないでください。

窓からは大きな満月が見え、これでもかとはかりに輝く。すると、機関車の脇を並列する物が浮遊している。それは、豪華な牛車が、金雲に囲まれて月へと導かれていた。

「かぐや姫？」

さすがに美琴も首を傾げるが、その牛車から美琴のような、これまた綺麗な平安風の女性が手を振っている。次いで、おつきの女官や弓を手にした護衛も手を振っていた。

「やっぱり、かぐや姫」

気付いた美琴は大きく手を振り返す。衛は見とれていた。

さらに、その後ろからは何やら怪しげな二つの物体が。

キコ、キコ、キコッ！

チャキチャキキュッキュッ！

「待ってよ、お兄ちゃん！」

「早くしろ！ 餅つきにおくれるぞ」

それは宇宙空間で、しゃかりきにチャリンコで進む、ウ、ウサギ。ウサギの兄弟だった。先をゆく兄らしきウサギは、杵きねを片手に担いで、サングラスをした、ちよい悪ウサギ。その後を必死に着いていく弟らしきウサギ。二匹はかぐや姫と同じく、月を目指しているらしい。

「ぶっ。可愛い」

その光景にほっぺを膨らませていた美琴は、思わず嘖いてしまったのだ。

衛はまたまた思う。

（かぐやは解る……ウサギはどっから来たんだよ！ わざわざ地球から来てんのか！？）

そのウサギの反対側には、同じく機関車に並列する赤い列車。同じく、魔法によってやってきたのかは知らない。

それを眺める二人を乗せた機関車は、しばらく宇宙遊泳を楽しんだ後、モカの魔法によって、いつの間にか、元居たシアターホールの椅子に戻されていた。

衛、美琴を含めた観客、いや、映画の出演者達とモカ一行は拍手、拍手、拍手の嵐。

その中で、モカは呟いた。

「私は、とても素晴らしい映画に魅せられました……」

\*

この楽しいイベントも終演へと近づいていた。

「さあ、紳士淑女の皆様！ 華麗な演奏と御食事をご用意いたしました」

そう言つと、その屋内は変貌する。劇場とシアターは消えてしまふ。ぐるぐると動きだし、現れたのは大広間。

大理石の床に、豪華な食事が並ぶ円卓のテーブルがぐるりと中央

を囲む。その中央ではダンスが踊れるように開けていたのだ。

モカの仲間、ウサギがピアノ演奏。ネズミはバイオリン。オウムは歌を歌い、他の演奏は魔法の力で楽器がひとりで演奏を奏でていた。猫はバーテンで、犬の大男は、なぜか大道芸を披露していた。なんとも賑やかな食事会。

衛はすでにがつついていた。

ガツガツ、ムシヤムシヤ

美琴はその食いつぷりに、驚かされていたが、さすがにお腹のすいた美琴も、負けず劣らずがつついていた。可愛い顔のわりには、食いつぷりがいい。

そんな二人は互いに顔を見合わせると、万遍の笑顔をみせた。

するとコツコツ靴をならし、男二人が衛達に近づいてきたのである。

肉を頬張ろうとしていた衛だが、その手が止まった。

一人は血のような真っ赤な髪に、似つかわない可愛い顔。も

う一人は、天使の羽のような白髪に綺麗な顔立ち。

彼らは、衛の隣に立ち止まると赤い髪の男が言った。

「突然すみません。遠目に見て居たのですが、どうしても一声かけたくありません。」

「あ、はあー？」

衛の気のない返事。美琴も手を止めて聞いている。

「とても素敵なカップルでしたので、どうしても間近でお目にしたかったです。」

一一一一一！

衛は久々に固まる。カップルなんて言われては、顔を真っ赤にするしかなかったのだ。すると赤い髪の男は握手を求め、手を差し出し

ながら言った。

「僕はティツチ。こっちはピピと申します。モカさんの魔法によって、猫だった僕とカナリアのピピを人の姿にして下さったうえに、お招き頂いたのです」

白髪のピピはティツチの紹介の後、衛と美琴に対して一礼する。

衛はティツチに手を差出し、がっちり握手を交わすと、ぎこちない笑みをこぼす。そして、ティツチとピピは邪魔しちやいかんと、広間の隅に姿を消したのだった。

衛と美琴は呆気にとられる。

「ティツチ……ピピ……？」

ティツチが自分達のことだけ喋ると、さっさと居なくなってしまう事に。

またまた顔を見合わせると、二人は笑いだした。

しかし突然、美琴が頬を紅く染める。衛がそうだったように、カップルなんて言われた日には、年頃の少年少女が意識しないほうがおかしい。

例えば、互いが一番互いの事を好いているのに、なかなかくっつかない。焦れたい。しかし、周りから“お似合い！”なんて言われたら、付き合っただけとも嬉しいものだと思うのです。大人でも

……

下〔2〕

カップルなんて言われた日には、年頃の少年少女が意識しないほうがおかしい。すると、美琴はたどたどしく言いだした。

「ね、ねえ。お、踊ら……ない？」

衛の背中に変な快感がはしる。手に持っていた肉が落ちた。

「ダメ……だよ」

衛は嬉しかった。嬉しかったが、何せダンスなどしたことがなかった。返事に躊躇う。(こ、こんなチャンスは二度とない。でも、ダンスしらねえ！しかし、踊りたい。でも知らねえ。運動会のフオークダンスでもいいのか!?)

すさまじい葛藤。衛自身、人生最初の葛藤。しかも運動会のフオークダンスって今時やってんのかよ。と言いたいほどだ。

しかし、衛は意を決した。

「うん。踊る」

大人になった。男になった。頑張った。しかし、内心は。

(知らねえぞ。どうにでもなれー！)

二人は中央の広間で大人達の中に交じり、恥じらいながら手と手を取り合った。

次の瞬間には、なんと自然と踊りだしたのだ。これが、モカの魔法によるものなのかは分からない。

多少のぎこちなさは否めなかったが、暫くするとその踊りは、いつの間にか周りに溶け込んでいた。

ステージには魔法によって、若かりし頃のルイ・アームストロングやレイ・チャールズ、ビリー・ホリデーなどが歌っている。おじいちゃんやおばちゃんには懐かしく、二人には新鮮で、二人が踊ろうとした時は、ルイ・アームストロングのワンダフルワールドが流れ、しばらく二人は優雅な踊りを続けていた。しかし、二人がダ

ンスに夢中になる中、その会場にモカの姿がなかったのには、誰も気付いてはいない。

ダンスも終盤に差し掛かろうとした時、突如ググッと美琴の方から衛に接近したのだ。只でさえ、両手を繋いで舞い上がっている衛は、足がもつれてしまい、大事な時にけつ躓つまずいてしまう。

———きあっ!!

美琴は声を上げ、開けた口を両手でふさぐ仕草。

「大丈夫？」

衛は照れ臭そうに頭を撫でる。

「あははっ。大丈夫、大丈夫」

なんて事をしていたら、美琴が大胆にも衛の胸に飛び込んだ。

衛はそのまま死んでしまうのではないだろうか、っていう程固まった。何回、固まるんだよ！

対して背丈は変わらないのに、なぜか妙にはまる。美琴は埋めた顔を上げると、

「今日はありがとう。とても楽しかったわ」

と、屈託のない笑顔。

衛も固まっている場合ではない。

ふうーっ と深呼吸をすると、

「僕もありがとう」

二人はクスクスと笑いだしたのだ。

いつの間にか優雅な音楽が止んでいて、衛と美琴がすべての人の注目を浴びていて、気付いていない。

一斉に、拍手の嵐！ その拍手に何事かと二人は周りを見渡すと、それは自分達に向けられたものだ、その時初めて知ったのだった。

二人は顔を赤くして、ここから逃げ出したくなる程恥ずかしかったが、その場で頭をペコペコ下げるので精一杯の麗しい二人。

その時だ！

ドゥドゥー………！

凄まじい爆音と揺れ。壁の一部が崩壊し、蠢く奇妙な黒い影が、その崩れた壁の穴からぞわぞわと雪崩込んできたのだった。

ホールは騒然となる。

衛はとつさに美琴を、自らの体を挺して守る。名は体を表わす。格好良い迄に守ったのだ。

衛は崩れた壁を見ると、埃が舞う中にモカの姿を発見した。

「モカだ！」

しかし、その容姿はポロポロになっている。

壁をズルズルはい回り天井によじ登る影、なんとも薄気味悪い連中だ。

モカの仲間達は、招待客を守りながら戦う。ウサギはピヨンピヨンと素早く交わり、キツクの嵐。又ズミのしがみ付いて、ガジカジ噛み付く。オウム人間の姿から鳥人間に変身すると、突いたり、足で鷲掴みにし高い所からポトポト落とし、猫はカリカリ引つ掻き回る。犬はその体格で、バツタバツタと薙ぎ倒す。

モカはポロポロになりながらも、手にする杖を武器に、不思議な光で敵を消し去ったり、杖の先で突き刺したりと懸命に戦っていた。それに触発され、衛も襲い掛かる影に、大皿をぶん投げたり、グレイプフルーツをぶん投げたり、時にはお肉をついばみ、残った骨をぶん投げた。

本当なら、ラ ユタのような滅びの言葉で一気に片付けたいが、そうはいかなのだ！

「くそっ！ 一掃できる言葉があったら………」

その何気なく発した衛の言葉に、モカがピクツと反応する。

「あつ！ ありましたよその魔法」

あんのかよ！

招待客とモカの仲間、衛に美琴まで一斉にツッコんだ。

「ではみな様……私の言う……言葉につづいてください！」

戦いながら、懸命にみなに訴えかける。

「いきますよ……っ！」

チチンパイパイ！はいつ。

……は、恥ずかしい。しかし、やらねばやられる。

みなのは気持ちは一緒。

チチンパイパイ！

モカは微笑んで、最後の呪文を唱えた。

恐いの恐いの、とんでけえー！はいつ。

全員大きく息を吸うと、どうやってこれだけの人数が、一斉に揃える事が出来るのだと言うほど、みなのが息が合う。

恐いの恐いの、とんでけえー！はいつ！！！！

次の瞬間。グググググッと掃除機にでも吸い込まれるように、不気味な集団は夜の闇に一斉に吸われ、そして遠く彼方へと吹き飛んでいったのだった。

みな茫然と立ち尽くし、言葉はない。幸いにも客人に怪我人は出

なかった。

すると、衛の後ろに隠れていた美事が、パチパチとモカの活躍に拍手をする。

すると、どうだろう。徐々に拍手の数が増えていき、最後はこれまでにない程の拍手喝采の嵐。

モカは照れ臭そうに、落ちていたハットを拾うと、深々と被り、腕を直角に曲げた紳士的な一例をし、暫く頭を上げなかったのだ。

そして称賛の拍手もまた、暫く鳴り止む事がなかったのだ……

\*

「今日はとても楽しかったわ。ちょっとスリルも味わえたし。でも、淋しくなるわね」

「私事です。しかし、いづれまた、お会いできる日がくるかと……」

「楽しみ。長生きしなくちゃ」

そう言い残し、衛と美琴を除く最後の招待客が、モカの館を後にした。その姿は扉から外に出ると、モカの魔法が解けてしまい、煌びやかな衣裳は普段着に戻り、老夫婦の姿にもどっていったのだ。た。

それを扉の手前まで見送った衛と美琴は、モカにさよならを言うのと振り向くと、既にモカの姿はなく、元のお爺さんに戻っていたのである。

「うおっ!？」

「ほっほっほっ」

美琴はクスクス笑う。

「なんだよ。モカ？ 爺さん？ どっちも同じか」

その時衛はさっきの会話を思い出す。

「……もう会えないの?」

「ほっほっほっ。ここは奴らに嗅ぎつかれたからのう」

「あいつらなんだったんだ？」

すると、お爺さんはググツと近寄ると、こそつと言う。

「魔法の使いじゃよ」

このお爺さんの言うことは、冗談のような言い方だったのだが、間違いなく魔法の使いだったのだらう。

「ふう〜ん。魔法……」

その時、美琴は開かれた扉の前で外を眺めていた。何かに、思い更けるように。

その美琴の姿を見て、たまらずお爺さんが名前を呼ぶ。

「美琴ちゃん……」

衛は思う。

(みことちゃん……？ って、みことちゃんって言う名前だったのか！)

そう、互いに自己紹介をしていなかったかのだ。が、正しくは始めにお爺さんはちゃんと美琴ちゃんと呼んでいる。それに気付かないほど、衛は舞い上がっていたのだ。

衛のおとぼけはさて置き、お爺さんに呼ばれた美琴は振り向く。

その顔はなぜか清々しく、吹っ切れたような屈託のない笑みを浮かべる。

「私、もう……もう平気だよ」

お爺さんは小さく頷く。

「ほっほっほっ」

お爺さんは優しい言葉ではなく、皺の堀がとてもやわらかい万遍の笑顔で、その美琴の微笑みに答えたのだった。

魔法じかけの僕ら

下〔3〕(前書き)

最終話です

下〔3〕

その顔はなぜ清々しく、吹っ切れたような屈託のない笑顔を浮かべる

「私。もう平気だよ」

「ほっほっほっ」

お爺さんは優しい言葉ではなく、万遍の笑顔で返す。

美琴は、一步。また一步と、扉に近づいていく。

すると急に振り返り、まっしぐらにお爺さんの胸に飛び込んだのだ。

「お爺さんありがとう!」

お爺さんは、美琴の頭を優しく撫でていう。

「こちらこそ。ありがとう。いい思い出が出来たよ。元気でさよならじゃ」

「うん」

美琴は素直な返事を返すと、お爺さんの胸から離れ、次は衛の前に歩いてくる。

衛は何故かまともに見れず、目を逸らしていたが、構わず話し掛けてくる。

「衛くんもありがとう」

(なに!?! 名前をなぜしってるんだ)

衛はキョトンとしている。

「あ、名前はお爺さんから聞いてしってたのごめんね  
衛は頭をガサガサ掻いた。

「今日は守ってくれてありがとう。格好良かったよ」

一一一一一ちゅ!

チューしちゃったよ。美琴が衛のほっぺにチューしちゃいました。さすがに美琴も勇気を振り絞った渾身のキスだったのか、顔を真っ赤にし、照れを隠すかのように衛の前から立ち去り、モカの仲間達の前に足を進めた。

きゅーっバツタン！

美琴以上に顔、いや、全身を真っ赤にして、衛は床板に倒れてしまっ。

「あへ〜あへ〜……」

「ほっほっほっ」

お爺さんは笑う。

フラフラな体をなんとか立ち上がらせ、頭をぶるぶると振った。

美琴はクスクス照れ笑いしながら、

「えーと、ウサギのマロンにオウムのナッツ。ネズミのシュガーに猫のチョコ。楽しかったよ。ありがとう！」

四人は美琴に一例を入れると、

「またいつの日か、お目にかかれますよいに。お元気で、お嬢様！」  
「うん。ありがとう」

そして、美琴のその時がきた。扉の前にたたずむ。

その時、お爺さんが犬の大男に告げる。

「よいかクツキー。最後の仕事じゃ。美琴姫を無事に届けよ」

「畏まりました」

そして美琴はまた振り返り、まばゆい笑顔と共に、

「バイバイ！」

と手を振り、扉を飛び出していった。

美琴のドレスは消え去り、いつもの可愛い小学生の普段の美琴の姿に戻り、去っていったのだった。そう……耳が聞こえなくなってしまう事以外は。

そしてバウバウとクツキーの声は、徐々に遠くに消えていく。

見届けたお爺さんの眼差しは、美琴からすーっと衛に移っていた。

「さあ。ヒロインは帰ってしまった。最後は主役じやの」

衛は何か言いたそうだった。

「あ、あの……」

するとお爺さんは人差し指を一本立て、口元に運ぶ。

シーーーーー

「言いたいことはわかっとなるが、無理なんじゃ」

「なぜ？」

お爺さんは、その巨体な体をぬつと落とすと、衛の両肩にポンツと手を当てて言う。

「魔法は君が思っとなるほど、大それたモノではないし、どうしても無理な事がある……」

「無理な……事」

お爺さんは目を閉じて頷く。

「それは時間じゃ」

「どういこと？」

「よいか。時間は誰にでも平等。それはいくら魔法でも時間を操れんのじゃ。この館は特別なだけで、一步出てしまえば、夢から覚めなくてはならない」

衛は学校の授業ですら、ここまで真剣に耳を傾けた事がないほどに、一生懸命お爺さん言うことを理解しようとしていた。

「年をとった者を、魔法で永遠に若返らせる事ができないように、彼女の耳も同じ事なのじゃ」

衛は肩を落とす。

「こら！ 主役のおぬしがしょげてどうする。彼女を立派に守った勇氣はどこへいった」

衛は彼女が自ら乗り越えようと、この館を旅立って言ったのに、今の自分が情けなくてたまらなかった。少年だからこそ、素直に思うえるのかもしれない。

衛は拳を固く握る。その握られた拳は、何人にも開くことは出来ないし、魔法の力も通用しないだろというほど、固く固く握られていた。

魔法の力かは分からないが、衛は大人になっていたのかもしれない。

「わかった。僕も負けないよ」

「ほっほっほっ、その勢じゃ」

衛は決意を胸に背筋をピーンと伸ばし、ズシズシ遅しく歩く。扉の前に立ち、送り出す四人に向かってこう言った。

「じゃあ、達者でな！ メロンにナッチに……バナナにコーン」

名前適当に言っただろ今！ ナッチって誰だよ。阿部な みじゃあるまいし。

しかし、四人は気にする事無く送り出す。

「ぼっちゃんもお達者で。ありがとうございました」

ふうー！

大きく息を吐き出し、振り返り、親指を立てて言う。

「じゃな！ さよならは言わないぜ」

すげーセリフ。でも微妙に格好いいぞ。

そうして最後に主役が、モカの館から飛び出し、普通の小学生に戻ってしまったのだ。

「ほっほっほっいい勇者が現われた。この町には魔女も容易には近付けまいて」

飛び出した館の外で衛は館を見上げ、しっかりとその目に焼き付けていた。そしてそっと自転車にまたがり、なごりおしそうに駆け

出そうとしたときだ。

バウバウ！

「おう！ クッキー」

衛は自転車の脇に駆け寄ってきたクッキーの頭を優しく撫でる。

「元気でな」

どうやらクッキーだけは覚えていたらしい。

そして颯爽と走りだし、その姿を自宅の方へと消して行ったのだ  
った……

クッキーがトボトボと館の中に入ると、

ギギギイードーン！

館の扉は固く閉ざされた……そして。

\*

夏休みが終わり、何日たっただろう……

「ねえ、待ってよー」

仲良し三人組の中で、一番足の遅い慶太が二人に言った言葉。

あの日のように、何かに引き込まれ、急に立ち止まったのは衛だった。

「うさつち危ねえ！俺がクリスチアーノ・ロナウド並に俊敏じゃなかったら、ドーンだよ」

伸治は相変わらずで、そしてドサツと慶太が……転ばない。慶太は遅しくなったようだ。その慶太が、衛に聞く。

「急に立ち止まって、どうしたの衛くん？」

「いや……ここに変な建物建ってなかったっけ？」

空かさず、伸治がツッコむ。

「何もなかったじゃん」

そう『館のカモ』の姿、形が跡形もなく、空き地になっていた。

「おつかしーなー!？」

ついでに、衛の記憶からも消されていたのだ。あの日、寝て起きたら、あの夜の出来事など何一つ記憶に残ってはいなかったのだ。

すると、道路を挟んだ反対の歩道に何やら見覚えのある顔。いや、衛の記憶から消えてしまった顔。そう、美琴がいた。

美琴は母親と手話でなにやら会話をしながら、楽しそうに歩いていた。道路を挟んだとは言え、館の前を歩いているのに足を止めないのは、やはり美琴の記憶からも館の記憶は消えているようだ。

通り過ぎる美琴に、衛は見入ってしまったが、何故か懐かしいような感覚も頭を過る。

すると、頭では考えていたわけではないのに、何故かふっとこんな言葉を衛はもらした。

「み、みことちゃん？」

ボソリと何気なく出た言葉。それは聞こえるはずもないのに、何故か美琴が衛に気付き一礼したのである。

その不可解な美琴の行動に思わず親が聞いた。

手話（お友達？）

（うん）

と美琴は首を横に振った。

そのまま美琴は歩きだしたのだが、直ぐに立ち止まり、母親にこ  
う手話をやり直した。

手話（よく見たら、お友達だった）

手話（やあね。変な子）

母親と美琴はニコニコと衛達に手を振っていなくなってしまった。

衛はもちろん、手を振られた伸治も慶太も何となく手を振ってい  
た。

「めっちゃ可愛くね！ うさっちの知り合いか？」

と、ウハウハで伸治は聞いてくるが、衛にはなんと説明してい  
いのかかわからず、口籠もってしまっていた。

「あ……うっ……」

衛は振り返したその手の平をじっと見つめる。

（なんか変だ。知ってるような知らないような）

こんな疑問を頭で理解しようと、一生懸命に脳みそは頑張ってい  
た。

そんな時、この近所のオバサンと思わしき数人が歩いてきて、館  
の噂を語りだした。

「ここのお爺さん、しばらく前に引越したけど、噂では亡くなっ  
たらしいわよ」

「あらま。確か若いときに手品じゃなくて、マ、マジックって言っ  
たかしら！？ を、やってたらしくて、夜な夜な何かやってたらし  
いし」

「やあねえ」

衛はその会話に、なぜか苛立ちを覚える。そして、とっさに出て  
しまったのだ。

「……違うよ」

最初は小さかった。

「違うよ！ 魔法だよ！」

自分でも分からなかった。なんで、こんな事を叫んでしまったの  
か。全然分からなかった。

「あら？ 何、この子……変な子ね」

衛は全力で、その場から走り去ってしまう。

もっと不可解なのは伸治と慶太。走り去る衛に啞然。

「お、おい待てよ衛！」

伸治がそう叫び、訳が解らないが、二人は衛を追い掛けて走りだした。

その時の衛は、悔しい顔？ 納得いかない顔？ 怒った顔？ 泣

きつ面？ いいや、違う。

“魔法” だよって何気なく叫んだ言葉だったが、衛のその顔は晴れやかで、曇りのまったくない笑顔。爽やかがとても似合う笑顔だった。

何か、とても勇気が湧いてきていたような気がしていた……

きつと。

魔法じかけの僕ら〔下〕 完。

そして、お爺さんはそつとその本を閉じ、ゆっくりと椅子から立ち上がると、長く何列にも立ち並ぶ本棚と、数えきれない本の回廊に歩いてゆく。

そこにはまだ誰もいない。

開館前の静かな図書館のようだが、そうなのかは分からない。

その膨大な本の中に、一ヶ所だけお爺さんが手に持つ本と同じ幅が開いていて、その前に立ち止まると、お爺さんは音も立てずに本を差し込んだ。

本は元の棚へと戻されたのだろうか……

きつと。

—  
—  
—  
—  
—  
—  
—

本編完結

下〔3〕（後書き）

本作品『魔法じかけの僕ら』を最後までお付き合い頂き、誠にありがとうございます。投稿に関して遅れたことを、お詫び申し上げます。申し訳御座いませんでした。執筆者、土郎。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9135a/>

---

魔法じかけの僕ら

2009年6月21日22時53分発行